

指導変革の軌跡

そのとき
教師はそして生徒は
どう変わったか

山形北高校



設立	1928年(昭和3年)
形態	女子校/普通科、共学/音楽科
生徒数(一学年)	約280名
'99年度入試実績	山形大28名、宮城教育大3名、福島大2名など国立大に59名の合格者を輩出。私立大は東北学院大33名をはじめ、延べ204名が合格。

山形県立
山形北高校
創立72年目の伝統校。65年度に音楽科を設置。部活動や生徒会活動も非常に活発で、知育・徳育・体育を柱とした明るくのびやかな校風を堅持しながら、情報化・国際化の進む新時代をたくましく生き貫く有用な人材育成を目指す。99年度は、ソフトボール部、新体操部、登山部、ソフトテニス部がインターハイに出場。新体操部は団体が3位に輝いた。

職業研究

クラス横断型の進路学習で

職場訪問インタビューを実施

「華やかな仕事に見える通訳ですが、幅広い知識が必要で、陰では大変な努力をしていることがよく分かりました。やりがいもありそうですが、憧れだけでは務まらないと思いました」
「公務員の仕事は、私たちが思うよりずっと幅広いことを知りました。だからこそ、公務員になってどんなことがやりたいのか、というこ

とまで深く考えておかないとダメだと感じました。それに、公務員試験を突破しなくてはいいないので、もっと勉強が必要だと実感しました」
これらは、山形北高校の1年生が夏休みに行った「職場訪問インタビュー」のレポートに記された感想の一部である。「職場訪問インタビュー」は、'99年度からスタートした「コスモスプ

山形北高校…変革のポイント
「コスモスプラン」を立ち上げる
高校3年間を見据えた体系的な進路学習計画である「コスモスプラン」を作成。生徒が自分の生き方を考え、主体的に進路を選択できるようにすることがその目的。
クラス横断型の班分けとチューター制を導入より深い進路学習ができる環境を整えるため、全クラスを将来希望する職業別の班に分け、教師が各分野のチューターとして指導に当たった。
「職場訪問インタビュー」を実施
生徒自身がアポイントを取り、夏休みに社会人にインタビューを行った。職業の内容研究だけでなく、生き方などについて考えるきっかけとなった。

ラン」の中心となる取り組みであった。進路指導主事の鈴木雄二先生は、生徒から狙い通りの反応が返ってきたことで、確信を新たにしていた。「進路学習は生徒の目的意識を育てる」と。
「卒業後の進路が、まだ決まらないんです」

それまでの山形北高校では、3年生の秋になっても、このような言葉を聞くことがあったと言つ。将来何をしたいのかを考えるきっかけを持たないまま3年生に進級し、受験を目の前にして、やっと進路について考え始める生徒が多かったのだ。また学習面でも、成績の伸び悩みという問題を抱えていた。模試の結果を見ると伸びなくてはならない受験期の成績が、1年次と比べてそれほど伸びていないという状況にあったのである。その原因は、家庭学習時間の少なき。高校受験が終わり、高校生活を楽しくしようという1年生の気分のまま3年間を過ごしてしまつ生徒が多く、教師がいくら「勉強しよう」と働き掛けても効果は薄かったと言つ。

「コスモスプラン」は各学年ごとに目標が定められた。1年次は職業観の育成と啓発的体験学習、2年次は適性の把握と学部・学科研究の深化、3年次は全国的な視野に立った自己実現(受験に向けての大学選びと学力育成)である。'99年度入学の1年生がその第1期生となった。その特徴は、進路学習をクラスの枠を越えて作った班ごとで行い、その指導をチューターの教師が行つことだ。生徒はまず、4月の宿泊研



山形北高校進路指導主事
鈴木雄二 Suzuki Yuji
教職歴19年。本校に赴任して9年目。担当教科は国語。
'98年度から進路指導主事となり、進路学習を全面的に見直す。
山形北高校進路課
保科 悟 Hoshina Satou
教職歴28年。本校に赴任して1年目に第1学年の「コスモスプラン」を推進。日本史を担当。「本校には明るくエネルギーのある生徒が多いです」

「この二つの問題の解決には、進路学習が有効なのでは、と思いつきました。自分はどうな人生を送り、どんな職業に就きたいのか。そのためには、大学でどんなことを学び、どのようなことを高校時代に学んでおけばよいのかを考えさせる。高校3年間を通じて自分の進路を考えていけば、3年生の秋にまだ進路が決まらない生徒の数も減るはずだし、目的がはっきりすれば勉強する動機付けにもなります」

'98年度に進路指導主事となった鈴木先生は、高校3年間の進路指導計画の原案を1年かけて作成。原案に対する他の教師たちの意見を吸収しながら、山形北高校の進路指導年間シラバスを完成させた。大谷駿雄校長は、「この指導計画を「宇宙のよつな広がりを持った進路指導」という願いを込め、「コスモスプラン」と命名した。



1 年次の職業研究は、宿泊研修中の進路希望調査。班分け、班内の役割分担などから開始。その後、質問や疑問点のある班は、チューターの教師に相談しながら進路学習を進めた。

修で理学・工学・農学系、医療・保健・福祉・家政系、人文・国際系、教育系、芸術系など、興味のある方向から7分野に分かれ、さらに将来やりたい職業ごとに4、5名の班を作る。一方、担任団は、それぞれ自分が詳しい分野のチューターとして、その分野を1年間通して指導する。
「1年次はクラスが文理分けされていませんから、文系科目担当の担任が、理系志望の生徒に『地球科学を学びたいのですが、どこかの大学に行けば学べますか』と聞かれても、的確なアドバイスができないかも知れませんが、それよりは、その分野について深く知る教師に質問ができる態勢を整えたいと思って、クラス横断型のチューター制を採ったんです」(鈴木先生)
「1年次の職業研究の一環として行った職業人へのインタビューの着想は、『二十歳のころ』(新潮社)という本から

得ました。この本は、東京大の学生が有名無名を問わず、会いたいと思った人に二十歳の頃の話を書き、それを原稿にまとめたものです。インタビューするためには、まずアポイントを取らなくてはなりません。そして、その人について調べ、どんな質問をするか事前に考え、取材に臨み、その内容を文章にまとめていく。この過程をそのまま職業研究に使おうと思いましたが、こう語るのには、99年度第1学年の進路担当だった保科悟先生。

「インタビューの相手は、自分の関心のある職業に就いている人。目的はその職業について話を聞くことですが、仕事内容だけではなく、なぜその職業に就いたのか、また、その仕事の大変なところ、この仕事をやっていてよかったと思うときなどを質問する中で、その人の人生に対する考え方や哲学といったものを生徒に感じ取ってほしいと思いました。高校生はあまり社会人と触れ合うことがありません。ですから、この貴重な機会に少しでも多くのことを感じ取り、考えてほしいかったです」（鈴木先生）

職業体験ではなく、あえてインタビューという形を採用して、その人の人生観や仕事に対する考え方も聞ける取り組みとした。生徒には職業という枠にとられない広い視野で、将来や進路を考えるきっかけとなったようだ。

『二十歳のころ』の

手法を踏襲し、山形北高校でも生徒自身に取材相手に電話をさせ、アポイントを取らせた。



進路指導室に3台、図書館に3台置かれたパソコンは、インターネットに接続できるようになっており、生徒が自由に使用できる。大学のホームページを見る生徒も多い。

学校の教師、山形北高校の事務職員、福祉施設に勤務するヘルパー、広告代理店に勤めるデザイナーなど、取材相手は多岐に渡った。取材後は、班ごとに取材で聞いたことや取材前に調べたこと、班員の感想などをまとめたレポートを作成。12月に全班のレポートは1冊の分厚い冊子になった。さらに1月には発表会を開催。七つの分野から1班ずつ選出され、学年

「生徒は、社会と接触する機会をあまり持っていないので、アポイントを取るために電話するのも、ずいぶん緊張したんじゃないでしょうか。アポイントを自分たちで取る中で、社会のルールを少しでも知ることができて、生徒にはプラスになったはずですよ」（保科先生）

また、生徒自身が取材相手に直接交渉するという過程を踏むことで、生徒は自分たちが主体となって行つて取り組みだという思いを強くし、「職場訪問インタビュー」に対する姿勢が、より積極的になったはずだ。

「職場訪問インタビュー」を行うために、生徒たちはまず、班の中で話を聞きたい職業を決め、それから家族や近所など、自分の知り合いにその職業に就いている人がいないかを探す。

第1学年進路指導計画（'99年度）

進路学習	進路学習のオリエンテーションと進路希望調査（4月26日）
進路学習	進路希望調査を基にした班分け（全部で63班）と顔合わせ、役割分担の決定（4月27日）
班長会	具体的な訪問先を各班で検討しておくように指示（5月18日）
進路学習	具体的な訪問先の決定と質問項目の検討。「なるには学習」の指示（希望の職業に就くために、卒業後どのような進路を選択すればよいかを研究する）（6月2日） 質問事項は訪問依頼の公文書と一緒に送付
班長会	訪問先に連絡を取り、訪問の許可をもらうよう指示（7月1日）
班長会	受け入れ状況の確認。訪問先に連絡を取り、日程を決定するよう指示（7月17日）
実践	体験学習「職場と保護者へのインタビュー」とレポート（記録・感想）作成＜夏期休業中＞
進路学習	班長会で体験学習のまとめ冊子作成の指示（10月）
進路学習	冊子による体験学習の共有（冊子完成：12月15日） 冊子は全職員・生徒に配付。訪問先にも送付
進路学習	各班の研究結果の発表（1月12日）

まだある、参考にしたい取り組み

土曜日の図書館講座

全学年の希望者が受講する形で、'92年度から開講している課題研究の講座。多角的な視点を獲得し、問題解決に役立つ論理的・総合的な力を養うことが目的だが、小論文の下地作りのために受講する生徒も多い。隔週土曜日の午後に、図書館の司書が中心となって運営。生徒は七つのテーマごとに学年、クラスを越えた班を作り、その班ごとに図書館資料や新聞の切り抜き、インターネット等を使って研究活動を行う。指導には図書館の司書以外に各班3名の教師が携わる。'99年度のテーマは「少子社会と福祉」「教育と個性」「情報化社会と異文化理解」「国際協力と経済の諸問題」「環境問題・自然科学と文化」「人間の死と尊厳」「女性の社会進出と諸問題」。それぞれの班が各テーマに沿った40ページ近い資料を半年間かけて作成。その資料を基に、ディベートも行っている。

1年間の進路学習を

全員の前で1年間の職業研究の成果を報告した。生徒がどう受け止めたのかを知るため、進路指導部では1月にアンケートを取った。そのアンケートからは、多くの生徒が進路学習を肯定的に捉えていることを示す結果が出た。

「9割以上の生徒が『職場訪問インタビュー』が役に立った」と答えました。事前準備やインタビューの仕方などを身に付けたので、今度は自分一人でもできそう、という感想もありました。実際、改めて自分一人で別の人にインタビューを行った生徒もいたんです。否定的な意見の生徒も十数人いましたが、自分のなりたい職業に就いている人にインタビューできなかったから、ということを理由に挙げていました。インタビューした相手の職業が自分の興味からずれていても、インタビューという手法を通して職業研究の方法を知れたという点で意味のある取り組みだったと思うのですが、それが伝わりきっていなかったようです。インタビューのために調べたり、アポイントを取ったり、という過程を体験することにも意味がある、と生徒に明確に伝えたいですね」（鈴木先生）

また、「職業について考え直すきっかけになった」という感想も多かったようだ。「高校に入学してすぐ希望を調査したので、憧れやイメージだけでその職業を希望しても、そのときはまだ職業についてあまり知識を持っていないわけですから、それはそれでいいと思

いかなかった班は友達に心当たりがないかを聞くなどして取材相手を探した。それでも見つからない場合はチューターに相談し、大学や卒業生に当たる。チューターも心当たりがない場合は、電話帳でその職業の人が勤めていそうな会社をピックアップし、チューターが片っ端から電話をかけて取材をお願いした。

「特に難航したのは芸術系の班です。俳優志望の班は劇団員に話を聞くこととしていたのですが、山形にはプロの劇団はありません。東京まで行かせることはできないので、山形に出張公演に来ることになった東京の劇団の団員に話を聞けるよう手配しました」（保科先生）

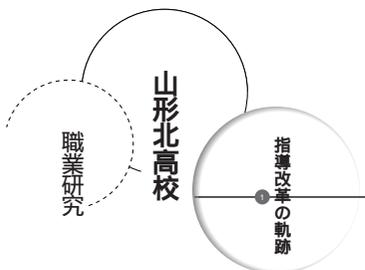
この他にも、動物病院を開業する獣医、こんにやく料理店の調理師、幼稚園・小学校・中学

っていました。『職場訪問インタビュー』を通して、興味ある職業に関しての知識を深めるだけでなく、大変な部分など、その職業の苦勞を知った上で進路選択をする重要性を感じてもらったことも目的の一つでした」（保科先生）

'00年度に2年目を迎える「コスモスプラン」。1年次に培った進路観を2、3年次で深化させるため、様々な取り組みが考えられている。

「2年次では、オープンキャンパスへの参加を中心とした、学部・学科研究を考えています。同じ学部・学科を希望する生徒同士で班を作り、それぞれ行きたい大学のオープンキャンパスに参加し、そこで得たことを持ち寄ってレポートにまとめてほしいでしょう。同じような希望を持った生徒が集まっても、大学を選ぶときに重視する観点などは違いますから、『そんな見方もあったんだ』とお互いに刺激し合いながら進路学習を進めていけるような方法を考えたいと思います。3年次は、1、2年次での進路学習を踏まえた上での受験を見据えた大学研究を進めたいです」（保科先生）

「コスモスプラン」のおかげで将来の目的を明確に持ち、勉強する動機付けがしっかりなされたため、家庭学習時間も自然と増えていく。そんな生徒たちが、山形北高校を卒業していく姿を、同校の教師たちは心待ちにしている。



指導変革の軌跡

そのとき
教師はそして生徒は
どう変わったか

春日部東高校



設立	1977年(昭和52年)
形態	共学 / 普通科、人文科
生徒数(一学年)	約400名
'99年度入試実績	埼玉大4名、宇都宮大2名など国立大に合計12名が合格。私立大は、東洋大50名、日本大32名、駒沢大24名など。

埼玉県立
春日部東高校 <http://www.higashi-hs.kasukabe.saitama.jp/>
創立23年目の新しい学校だが、生徒の個性を伸ばすべく、3年間を見通した進路指導に力を入れ、進学希望者は9割を超える。生徒数の約2割を占める人文科は、'94年度に設置。文系科目に重点を置いた多様な科目選択ができる。

物理部・生物部は県研究発表会優秀賞を受賞。陸上部は全国大会・インターハイ連続20回出場など部活動も盛ん。

春日部東高校……変革のポイント

年間最大80号発行の「進路だより」

1、2年次は年間に各20号、3年次では50から80号ほど発行している「進路だより」。最新の進路情報や学習法を生徒に伝える情報発信ツールとして活用。

3年間で29回の進路関連行事

進路説明会、進路講演会、進路LHRなどの進路関連行事を進路指導部年間行事計画に沿ってきめ細かく設定。

進路関係資料の共有化

進路関係の各種データについては、パソコンでいつでも引き出すことができる。電子メールによる教師同士の情報交換も活発。

進路だより、進路説明会 きめ細かい情報の提示で 進路意識を高める

「進路だより」の担当者を誰にするか。それは進路指導主事の久保田清先生にとつて一つの問題だった。春日部東高校の「進路だより」には伝統がある。それは内容のきめ細かさであり、発行回数の多さだった。1、2年次には年間に各20号ずつ、3年次に至っては50号以上も発行している。内容は、文理選択についてのレクチャー

や、進路アンケートの統計結果、校外模試の詳細分析、オープンキャンパス情報、推薦入試情報など、学生ごと、学期ごとに必要な情報をその都度フォローしていくものだ。

「本校の生徒は、リーダーシップを取ったり、自分から進んで情報収集するようなタイプの子は少ないのですが、教師の言うことを聞く素直

卒業前の3年生に行った、進路に関するアンケート調査で、4分の3の生徒が「進路だよりが非常に役に立った」と答えたことも「進路だより」の効果の裏付けとなった。事実、「進路だより」に力を入れた学年は進学率も上がっている。「しかし、進路指導部の仕事として一番手間が掛かるのも事実です。これまでの先生方が培ってこられた情報の蓄積に加えて、さらにその時々合った情報を自分なりにセレクトして生徒に逐一伝えていってほしいのです。そのためには、発信源が分散しない方が望ましいと考え非常に負担は掛かりますが、基本的には1学年1人の先生に専任で担当してもらっています」

ら、いつでも原稿の制作ができるように、個人的にノートパソコンを購入し、学校に常備した。教師共用のパソコンも職員室の隣に8台ほどあるが、それらは他の教師も成績処理や電子メールのやり取りなどで、休み時間ともなるということも満席になる。それらが空くのを待つのがもどかしいほど時間に追われていたからだ。

「一時期は、毎日発行していましたから。これは、と思う情報はすぐに生徒に流したいと思

99年度の「進路だより」の一部。模試の結果は前年度と比較したデータをグラフにしてみました。また、パソコンで制作することにより、効果的に作成できることになりました。

'98年度、3年生の

「進路だより」を担当した大戸和孝先生は、久保田先生から「見込まれた」1人だ。大戸先生は年間発行回数80号という、同校の「進路だより」始まって以来の新記録を達成した。

「前年に『進路だより』を担当されていた先生の仕事を傍らでずっと見ていたので、どれくらい大変かは見当が付いていました。でも、自分なりに、こつしたらもつと生徒は読みやすくなるというプランがあったので引き受けたんです。発行回数が増えたのは模試結果をグラフ化するなどビジュアル面に凝ったところ、情報が膨らんでしまったんですよ(笑)。その年はクラス担任ではなく副担任だったので、比較的に時間に割けましたしね(大戸先生)。

大戸先生は「進路だより」の担当になってか



春日部東高校進路指導主事
久保田清 Kubota Kiyoshi
教職歴29年。'97年度より同校に赴任。英語科担当。「本校に来てから仕事が2倍に増えた」とのこと。
前進路指導主事が築いた進路指導の体制をどう発展させるかを思索中。



春日部東高校進路指導部
大戸和孝 Odo Kazutaka
教職歴20年。'94年度より同校に赴任。'99年度は第1学年の担任、及び進路指導部を担当。日本中担当。'98年度には「進路だより」年間80号発行という新記録を作った。

うと待ったなし なんです」

3年次の「進路だより」の内容は大体次の通り。

4月は進路室の利用方法についてレクチャー。

5月には教育実習生による受験体験談を集める。教育実習生はほとんどが同校の卒業生なので、生徒も親近感を持ちやすく、この特集をきっかけに実習生に進路についての相談や質問に行く生徒も目に付くと言う。6、7月には各大学のオープンキャンパス情報など。2学期に入ると推薦入試に関する詳細情報。以下、受験まで大学からの最新情報をピックアップして流す。この年はセンター試験受験者用に、会場までの地図や持ち物チェックリストも「進路だより」でフォローした。

「他に、各模試の分析は、その都度出していきます。また、入試の達人コーナーを設け、O&A方式で受験に対する心構えや必要な準備、知っておいてほしい面接のマナーなども情報とし

生徒に提供します。過去の『進路だより』を基に、この時期に何を載せるかという確認をしますが、入試制度が変わったり、時期がズレたりということがあるので、同じような内容でもそのまま流用はできないんです。パワーがいる仕事ですよ」と話す大戸先生の横で、久保田先生が「我が意を得たり」といった風に頷く。

「大戸先生の熱意が伝わったのでしよう。その学年は合格者が6%アップしたんですよ。本校の生徒は素直な分、きちんと進むべき方向と具体的な方法を示してやれば、それだけ伸びるんです」。

生徒に対する

「至れり尽くせり」は、「進路だより」だけではない。同校のもう一つの伝統が、3年間で29回を数える進路関連行事である。学年ごとに、進学や就職といった目的別に、進路LHR、進路説明会、進路講演会などが頻繁に開催される。

「進路だより」を個人レベルへの入試情報伝達ツールだとすると、これらの行事は学年全体の進路に対する意識を高め、進学意欲を高めさせるためのツールと位置付けてもよいだろう。

例えば2年次では、年間10回以上、様々な行事を行っている(表参照)。特に3月には、その年大学に合格した3年生を招いての進路別懇談会を催し、受験への意識を高めている。98年度は28名の3年生を大学別、あるいは学部別に振り分け、2年生は各教室に20から40名が参加しての懇談会となった。また、同じ3月にPTA

ス単位の進路LHRや個別指導で文理選択科目選択、志望校決定などの大事な部分はフォロイをお願いします。(久保田先生)

1992、3年で、

同校では校内LANが整備され、すべてのパソコンがネットワーク化した。生徒一人ひとりの成績がデータベースに入っており、成績評価システムもLANを使っている。

「クラス担任、教科担任に対しては、生徒向けの情報とは別の進路関連情報を流しています。具体的には他校の情報や、本校生と他校生との

春日部東高校のその他の取り組み

保護者会

98年度まで同校では1、2年生の保護者を対象に、パネルディスカッション形式による保護者会が行われていた。大学に入学した子を持つ保護者、卒業生(大学1年生)教師など多彩なパネラーで「受験、そして親子」などをテーマに討議を行った。受験直後の大学生や、保護者の体験談は、日頃なかなか子どもに聞けない本音の話も出て、今後、自分が子どもと向き合う際の貴重なアドバイスになったと保護者には非常に好評だった。

大学見学会

99年度に、パネルディスカッションに代わる企画として行われたのが、保護者による大学見学会。バスをチャーターし、東京都内の大学を2校見学した。バスの中では、進路を考えるに当たった進路指導担当教師からのレクチャーも行われ、同校の見学会は移動する間の時間をうまく使い、体験型で中身の濃い進路説明会となった。

	1年次	2年次	3年次
4月	学習のしおり・進路希望調査 進路適性検査(自己理解)	進路希望調査 進路適性検査	進路希望調査 進路LHR(進路の手引きの指導) 進路別説明会(文系、理系、短大、専門)
5月	進路LHR(進学について1) 進路LHR(進学について2)	進路LHR(進路の手引きの指導) 進路LHR(学部・学科研究)	
6月	進路LHR(学部・学科研究) 進路説明会(類型・科目選択) 進路LHR(自分の進路を考える)	進路説明会 (科目選択と進路)	国公立大説明会 卒業生との懇談会
7月	進路講演会(卒業生)		大学・短大夏休み直前説明会 大学・短大説明会(入試担当者による)
9月	進路LHR (進路の手引きの指導)		センター試験説明会 推薦会議(指定校推薦入試) 指定校推薦決定者指導
10月	進路希望調査		
11月		進路LHR(私の進路を考える)	
12月		進路希望調査 進路説明会(進路別学習法)	入試動向説明会 推薦入試合格者指導
1月		専門学校説明会	出願先調査
2月	進路説明会(分野別)	推薦入試説明会	
3月	進路講演会(PTA協賛)	進路別懇談会(大学・短大) 進路講演会(PTA協賛)	進路指導アンケート

上記表には進路LHR・進路説明会・進路講演会以外の行事も含む

進路指導年間行事(99年度)

協賛の進路講演会を1年生と合同で開催。この講演会は「生き方について学び」という主旨で、主に大学の教授などに依頼している。

これが3年次になると、より頻繁に、また文系、理系、短大、専門学校と、進路別に分けてより具体的に詳細になる。例えば、7月には夏休み直前説明会を行い、進路別に夏休み中の勉強方法についてレクチャーする。また、同じく7月に大学・短大の入試担当者による説明会もある。この説明会には同校の志望者が比較的多い大学20校ほどの入試担当者が来校し、生徒は2大学まで説明を聞くことができる。夏休み明けの9月にはセンター試験説明会で、センター

学習時間・成績などの比較データ、生徒に調査した進路アンケートの詳細結果などです。これらを見て、まず本校の先生方に生徒の現状を把握していただき、どこを強化すべきかを共通認識として持っていたくことが重要です。これらの情報はすべてMOディスクに保存しており、いつでも活用できるようにしています。(久保田先生)

「LANが整備されたから、クラス担任や教科担任との連絡が電子メールでできるようになりデータのやり取りなども飛躍的に便利になりました。『進路だより』に載せてほしいデータもLANを使って送ってもらいます。休み時間は共有パソコンの奪い合いですよ(笑)。(大戸先生)ただし、パソコンの活用頻度は教師により差があり、情報格差を生む恐れもある。すべての教師に情報が行き渡っているかを折に触れて確認するのも、進路指導部の大事な仕事のひとつだ。

きめ細かい指導と

情報提供といった、教師側の努力によるバックアップ体制が確立している春日部東高校。しかし「至れり尽くせり」にしすぎると、かえって生徒の自主性が損なわれるのではないかと、といった疑問も残る。

「それは難しい問題です。生徒の自主性に任せたかと思いますが、教師が引っ張ることも必要だと思つています。近年、家庭での学習時間は驚くほど減っています。以前、3年生の夏になつてから『先生、センター試験ってマークシ



職員室の隣にある教師専用のパソコンルームには、8台のパソコンがある。特に定期テストの前には、テストを制作したり、成績を処理する教師で混雑する。教師専用のパソコンは校内に合わせて約30台ある。

試験の出願方法についてレクチャー。12月には入試動向説明会で、その年の入試動向と直前の学習法についてのアドバイスを文系、理系、短大別に行う。

「これらの説明会では『進路だより』とは別に詳しい資料を配付します。ただ、全体説明会だけではどうしても情報に漏れが出る恐れがあります。そこで、クラス担任の先生方に、クラス一トなんですか?』と聞いてきた生徒もいました。教師が当たり前だと思っている情報を生徒が知らないことがあるし、自分で調べる生徒が少ないのが現状なんです」と大戸先生は語る。

「けれど、これ以上『進路だより』も『進路関連行事』も増やすことは難しい。今後は一人の先生に任せるのではなく、与える情報の質を進路指導部全体でも十分に吟味し、その学年のニーズに合ったメニューを柔軟に構築していきたいですね。大学を卒業した後のことまできちんと考えた進路選択ができるように、最大限のフォローをしていくつもりです」と久保田先生。また、過去3年間に渡って調査した進路に関するアンケート調査によると、「進路だより」の評価は連続して高いものの、進路講演会の評価は今一つ伸びていない。

「講演会の内容は、基本的に講師にお任せしていたのですが、今後は学校側からきちんと『こういう主旨でこういう話を』と具体的に確認していくことを思っています。今の生徒たちは、社会がいろいろな意味で厳しいといふことを実感としてつかめていません。今後は生徒に、今のままでよいのか、これからどうするべきなのか、そついつことを自分で考えてもらえるきっかけになるような、進路関連行事を考えていきたいと思っています」(久保田先生)

